別れる理由

II

小島信夫

別れる理由

小島信夫

別れる理由

別れる理由 Ⅱ

一九八二年八月二十日　第一刷発行
一九八二年九月二十日　第二刷発行
著　者　小島信夫
装幀者　田村義也
発行者　三木　章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定　価　二五〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Nobuo Kojima 1982, Printed in Japan

ISBN4-06-200121-7 (0)　(文1)

別れる理由 Ⅱ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

48

「はやくいらっしゃいよ、先生」
さとのの妹の悦子が、どうして、そのように気易く自分に物がいえるのかしら。永造はいまいましく思った。(どうして、この女はこう大柄なんだろう)
「どこか、きめてちょうだいよ」
「このあたりに適当なところが二、三軒はあるはずだがな」
永造は喫茶店のあり場所のことをいっているようでもあり、連れこみ宿のことをいっているようでもあった。二種類のうち、どちらの一つを選ぶかは、あなたの意志次第です、悦子さん、といいたい気持が彼にはあった。彼はこういう時のこの自分の煮えきらない態度が、いつの頃からか多少不愉快にもなってきていた。それに、悦子さん、とロの中で女の名を呼ぶだけにしても、何か、女の名前というものが不思議な気持を起させた。
彼はたった今、講演会場から出てきたばかりだ。同じように会場から出てきた中年の女たちがゆっくりとした足どりで、講演の名ごりを楽しみながら(? あの話は面白くなかったとしゃべり合いながら歩いているのかもしれない。そうかもしれない。そうだったら、どうしよう? 何という考え違いをしたのだ。そんなことはない。たしかに聴衆には手応えはあった。一言々々うなずいてきいているものもあった。その女は、自分はその顔かたちを忘れがたい、と思いながら、彼は話しつづけていた。どんなになつかしく、握手でもしたい気持だったろう。その女のためになら、何をしてもいい、とさえ思った)会が終ったとき、一人の女が演壇の下へきて、彼の本にサインを求め、そのあと、夫と子供のことを持ち出し夫が長期の仕事で関西の方へ行っているといった。夫は自分を嫌っている。それが物のいい方で分る、といった。
「嫌われているように思えるときは、御主人は決して悪いことはしていませんよ」
と彼は演台にかがみこみながらいった。
「安心なさい。それは間違いない。そのことをさきほども申しましたでしょう」
「それは分っています」
「それならいいじゃありませんか」
「でもあれは」
「一般の話だというのですか」
「まあ、そうです」

女は周囲を見渡した。そこに彼を待っている悦子の眼もあったが主婦は気がつかなかった。
「一般ということはあなたの場合にもあてはまりますから、御心配いりません」
と彼はわざと声を大きくした。
「ええ、でも」
「あのぼくの話はですよ」永造はもっと声を大きくした。立っている女たちに加勢を求めるように。「ぼくとしてもですよ。自信のあるものなんです。物の本で読んだことではなくて、……」
永造は口をつぐんだ。自分の口が臭いことに気がつき、手で口を蔽った。そのために口をつぐもうとしたのではなかったが、つぐみかけて気がついた。そこのところは、さきほどの講演の中でも、綱わたりをやってのけたところだった。
「ぼくが浮気をしているということではございませんよ。しかし真に迫っているから、あるいはとお考えになる方は、そう思っていただいてもかまいません。どうか宜しいように」
あの時聴衆は笑った。あれは具合がよかった。ああいうふうにして笑わせるのが、今の世の中に生きて行くコツだ。あのあと、聴衆とのあいだに、どんなに親しみが湧いてきたことだろう。あとが楽だった。

第三列めをねらえ。第三列めの誰かひとりに目標をさだめて、それに語りかけるようにする。あのことで聴衆が笑ってから、自分は第三列めをねらうことが出来た。それは、努力のいることだった。大勢の女たちがきいているのに、そのうちのひとりを選ぶということはつらいことだ。
彼はうなずきはじめた女を発見した。来ているはずの悦子も犠牲にしなければならなかったが、三列めの一人の女にひきずられて、たしかに聴衆はそのひとりの女に負けないようにほとんど全部が注意を二人の話に向けはじめた。そうでなければ自分はたいてい天井を向いてしまう。誰の顔も見ない。自分の視線は天井と演台の上とを行ったり来たりする。講演が終ってから、はじめて聴衆の顔を盗み見するという有様である。それが今日はとてもぐあいよく行った。
とっておきの話さえ出した。
「浮気をするとき、男性に隙を見せてしまってはいけない。見られないで見てやるぐらいにしてやるのですよ。気楽に親切にしすぎてはいけませんよ。あとでバカにされる材料を提供するようなものですから。『何でも見てやろう』という本があったでしょう、見てやろうですよ。いいですか。ともすれば見られてしまいますからね。見られるのはともかくとして口に出して吹聴したりするような自惚やの男はおよしなさい。区別？　区別はむつかしいですね。自

惚やにかぎって、なかなか手を出さないから、そのおつもりで、みなさん。ある男はみなさん、女性の人の足の指のかたちやら、足の裏のタコやイボや魚の目や足の並はずれて大きいことや、盲腸の傷あとやら、医者がはさみをいっしょに縫いこんだあとで取り出したために出来た大きい傷あとやら、ちゃんと、微妙な瞬間に見ていたのですよ。ああ、こわい、いま誰かいわれましたが、その通りですよ。そうなったら、もう取りかえしがつきませんよ。相手はダンナさまじゃありませんからね。

それから自分のダンナに話すように気軽に子供の話やら、家のことなどあんまりお話しにならない方がいいのじゃありませんか。少くとも息子や娘の自慢話はいけません。せいぜいが、相談です、悩みの相談ですね。進学指導の相談ぐらいのところですね。ダンナさまのことを相談したりしてはいけませんね。英語や数学や、音楽や、そんなところですね。スポーツもいいでしょう。しかしいずれにしても、ダンナさまに話しているつもりになるのは仕方がないとして、そこは一線を劃すべきですね。これはその場の心理状態としてはたいへんにむつかしいことだから、今から気をつけておかれるにこしたことはありません。ダンナさまのことを思い起させるようなことや、ダンナさまのことを実は思っているというようなことは仄めかしてはいけません。これはせいぜい浮気の終りにすることですから。家庭的なフンイキもまんざら悪くはありません。ダンナさまの留守に家の中で御馳走をしてやったりするのも、いいことでしょうね。もうダンナさまの方は見向きもしないが、ほんとうはおいしい料理のレパートリーも持合せてないことはございませんでしょうし、作りがいがありますからね。でも、ほんとうに作りがいがあるでしょうか、みなさん。(ここで声を大にした。水をのんだ。一息ついた)これは、ひとりひとりの胸にきいてもらいたいし、私はここでみなさんにもおききしたいくらいのことです。

男性たちは心の中では、みなさん、主婦でもあり、お母さんでもあり、妻でもある、この三つの要素をそなえた皆様方、多くの方はそうでしょう。でも何も三つが具わってなければいけないというわけではありませんが……(おれはそのときどこかできいているに違いない悦子のことも勘定にいれていたのだが)しかし私はこんがらがっていました。あなた方が浮気をなさることと、あなたがたのダンナさまがたが浮気をなさる場合のことを何か間違えていたというか、何か片手落ちのような結果になったようでしたね。……」

眼の前にいる、この「女性」は、講演中どこにいたのだろう。

「私の主人は、関西の方で女の人が出来たのではないかと思いますが、それをいうと、バカなことをいうな、と笑っ

ているだけです。私の主人は笑っているだけです」
「私はいいましたよ、優しくなると。優しくなるといっても、笑っているだけだ、といっても、これは主観的ないい方だから、その実体というものはよく分りませんからね。私はあなたと御主人との前に立っているわけではありませんし、それに、もっとハッキリいえば当事者ではありませんからね」
　彼は笑った。まださっきの気分が残っていた。
「私が出かけて行って身の廻りの世話をするわけにも行かないし、せいぜい東京にもどってきたときの間だけですから。その間でも主人は前のように私を喜んでくれないのです」
「同じベッドで寝られますか」
「ええ、それは」
「それならいいじゃないですか。ぜいたくいってはいけません。ねえ、みなさん、上出来ですよ」
　と彼はそこに立っている数人の女たちの方にも声をかけた。勿論くわしく見はしなかった。
「でも、妻である私には冷淡なことが分るのです」
「そういうことはよくありますわよ」
　と誰かがいった。永造は、わざとふりむかなかった。そうして、眼の前の女の顔のあたりを見ながら微笑をうかべてうなずいた。その女は三列めでうなずいていた女かもしれない。そう思えばそうだ、という程度にしか分らなかったが。
「よくあるわよ、ねえ、みなさん」
　と、その嘴を入れてきた女はくりかえした。その中に少し離れたところに悦子がいた。
「さっき先生が話された、シェークスピアの『オセロ』の奥さんみたいに、デスデモナという人でしたか、先生」
「そうです、デスデモナさんです。それがどうしましたか」
　わざとまた「さん」をつけた。みんな笑うと思ったが、誰も笑わなかった。
「あの方のように何もしないのに殺されるよりはいいですわよ」
「主人は積極的ではないのです」
「それだけではどうして、浮気していると分りますか」
「主人はたしかに嫌っているのです」
「嫌っているというと？　行為ですか？　それともあなたを。どちらですか？」
　永造は時計を見た。講堂の中には、まだいくつかの小さなグループに分れて女たちが話をしていた。
　あきらかに、この「女性」は自分の講演を少しもきいてはいなかった。演題は「夫婦の危機」というのだったから、それを見て相談にきたのであろう。
「私は相談専門ではありませんから」

と永造は、いってしまってから、つまらないことをいったものだと思った。
「しかし、それはかまいません」
永造は心がせきながらこれで心の中を見すかされることは免れたらしい。たとえ聴衆の中のたった一人にせよ、粗末に扱うというところは見せてはならない、本人だけでなく、ほかの連中も、この女をバカにしていようともそういう態度には、けっきょく反撥するかもしれないと思った。いや、待てよ、こういう自分が、愚かな一人の女にかかずらわっていることで、その無器用さを軽蔑しないまでも、……てっとり早く事を運ばない、……女が待ちかまえているのに、女を満足させてやらないうかつな男というふうにとりはしないだろうか。どうしてこの女がくいついて離れないのだろう。
「それ以上こまかいことは、ここではお話しになることもムリです」
「さっきおっしゃった二つのことに区別があるのですか」
「二つのこと？　ああ、行為と、あなたという人間とですか」
「そうです。先生がおっしゃったから、おききするのですわ」
「あなた自身は区別がないと思われるのですか、それともあると思われるのですか」
「そんなこといわれても私にはよく分りません」
「そうですか。これはお医者とおんなじで、あなたが自分のことを素直にお話しして下さらないで、いいかかって閉じてしまわれると、こっちは診断を下すことは出来かねるのですよ。それに人生のことはなかなか難かしいでしょう？　それに治療するといってもクスリもなければ、私が何かするというわけにも行かないのですから。男の人はねえ、奥さんに対してはあまり興味を抱かないことはあるものですよ。それでも、実は奥さんを心の底では大事にしているということを念頭において下さい。金はちゃんとくれますか」
「その方はマジメな人ですから」
「お子さんは大事にされますか」
「誰がですか」
「勿論御主人のことですよ」
「もともと子ぼんのうですから」
「おいくつです」
「四十です。いや四十一かしら。四十だわ」
「疲れているだけじゃない？」と傍観者の「女性」が声を出した。「あんまり、せがんではいけないのよ。少くとも、そうだと思って、しばらく様子を見てごらんになったらいいじゃない。あなた、あんまり強烈に迫るのじゃないの？ねえ先生。なんでも、女と男とはアンバランスになるんで

すってよ。おたくの年頃になると、だから、そういうときは、おたくの方のことを、先生にうかがうのよ、ねえ、先生？　私はそういう話だと思って、今日きいていたわ。その方がたのしいもの。空想でなら何をしたっていいもの。小説だって何だって、それで読むんですもの。私は、今日のお話の中であそこがよかったと思ったわ」

永造もさっきの女も黙っていた。何のことをいい出すのだろう。彼は盛んにしゃべっている女よりは、悦子の方を見ることにした。大勢の人間を扱うときは、こうするのがいいのである。主役はあくまでさっきの質問者である。この愚かしい質問者もやりきれないが、そうかといってこの積極的に働きかけてくる女性に調子を合せることは危険である。

「あそこことは、どこのことですか」永造はあたりに気を配りながら、口の中で、呟くようにいった。恥をかかされることにならなければよいが、そのときにはそのときで、また打つ手がないことはない。

「ほら、先生、アンナの夫が手をボキボキやるので競馬からもどってきた彼女がよけい夫をうとましく思う、と先生がおっしゃったでしょう。私、ほんとに、よく分る気がしたわ」

「そんなこと、考えていたの、あなたって」

とその女の友達がいった。

「存分に空想をたのしんで下さい」

「あら、実行しちゃいけませんか」

「いけませんな。もし実行をお望みの方は、自分の御主人と相談なさることですな。第一、私は何も責任はないし、恨まれたくないですから」

「先生の奥さまは羨しいわねえ。こんなお話毎日きいていらっしゃるのだから、奥さまの喜びと、情事の相手の喜びと両方味って暮していらっしゃるようなもんですもの」

永造は天井を仰いでかすかに笑った。今日この講演会の金はさっそくにも主催者の出版社から自宅へ届けさせることになっていた。

「どうしてくれるの？」

と陽子から仕事先きのホテルへ電話がかかってきたばかりだ。

そういう自分のことと、この講演会や、今こうして話していることは、関係のないことだ、あまりに遠いことだ。較べることさえ無意味なことだ。

（おれにはこの女たちよりずっと上等な恵子という女がいる。おれは、さっきからこの女たちと較べていたが、）その女は今でもこちらがその気になれば、夫がありながら自分に「身体を任せる」こともあり得る。そしてそれはここにいる誰も知らない。しかも、恵子はこちらがムリヤリに「手に入れた」のではない。永造は悦子の方を見た。悦子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は眼で早く出るように促しているらしい。彼はこのときもわざとハッキリ悦子の方を見ていなかったが、悦子には察しがつくように、鞄のトメ金をしめた。
「まだ終ってはいませんが、このくらいのところが、ちょうど宜しいところじゃありませんか。でないと私はあなた方のことを知り過ぎる結果になりかねませんですからね。知り過ぎると味気ないものですよ、何でも」
永造はこれ以上は絶対にサービスはしないといいきかせながら、外へ出た。ここでよくしゃべった女たちは、あっちこっちの講演に出かけてどの講師にも同じような質問をしかけるのであろう。
悦子と歩きながら、永造は講堂にいた別のグループや、まだそのあたりの道にうろうろしている女たちのことが気になった。彼女らは何か自分に対して批判的なのではなかろうか。何に対して？　そう、不真面目？　それなら何故まだうろうろしているのだろう。さっさと引きあげたらいいではないか。八割がたはうまく行った。それでいい。
「このあたりは、あまりよく知らないもんだから」
「あなたに任せましたから、いいところへ連れてってちょうだい」
もし温泉マークへでも連れて行けというのなら、それをいつかいいだす必要がある。その前まで行って、断わられても、困ってしまう。話の順序からいうと、講演をきき、講演のあとあそこに立っていた以上、女たちの話をきいていた以上、悦子がどこか宿へ行けというのも自然かもしれない。
「先生は、いつもああいうことを話すのですか」
「相手によって年齢によって違います。男と女によって違います」
「今日は欲求不満の奥さま向きというわけですか。私はああいう人たちはもう少しちゃんとしているのかと思った。なれあいなのね。ダンナさまと。家の中の話を外へ出す出し方も知らないで、ジメジメしていて、いかにも日本的で、図々しくてそのくせ哀れみを乞うみたいで、ケジメがなくて、それに第一、靴下が皺になってずり下っているのに、前かがみになって靴の上で二重にくの字を描いている。先生がそういうことを話して下さるものと思っていたのよ。どうせおかしがらせるのなら、内容のあることで笑わせるべきだったと思ったわ。先生はそれが出来ると私は思ったのよ。私ひとりかもしれない、先生を理解していたのは。だいたいアメリカというものを知らないのよ」
「ありがとう」
といいながら永造は、悦子の様子をうかがった。
「ありがとうじゃないわ。ハラハラしちゃった、私」
「すみませんな」
「アメリカ人の家庭というものは、ちゃんとしているんで

すよ」
「思ったよりそうですよ。あれは誤解されていますね」
「夫がおもて向き親切だから何をしてもいいといぅわけじゃないのよ。きびしいということを知らないのよ」
「あの人達はうさ晴しをしているのですよ。気がついているかどうかは別として」
「PTAのママさんというものは、一つひっくりかえせばああいうものですよ。よくしゃべるのもいれば、思い悩む型もいる」
「アメリカ人のハズバンドというものは、財布をにぎっているんですのよ」
「小切手をつかうせいもあるのじゃないですか」
「それだって同じことですよ。小銭を渡されるだけですから。一事が万事なのよ。ワイフが勝手なことをしていいということにはなってはいないのよ」
「そういうことは、前にあなたか、さとのさんからか、うかがったような気もするが、いや、全然うかがってはいないかな」
「なにをしたっていいんだけど、アメリカを誤解しているということが許せないのよ、それを助長しているのは、先生なんかの見識ある人までが、あおるようになさるためだと思うわ。私、ほんとにがっかりしちゃった」
どうしたらいいのだろう。何か、ひどくがっかりしたといっている。永造は、周囲を見廻した。彼女がツンツンしていたのは、やっぱりこのことのためだったのか。ただ二人で歩くのが、人眼について体裁が悪くて仕方がない、早く家の中へ入って、いうことをいい、することをする方がいい、というのだ、と思ったが。悦子はアメリカ人の老人と一緒に歩くのは恥かしくなくとも、日本人の自分達のような年齢の、つまり中年の男と歩くのは、気になって仕方がないのであろう、と思っていたが。
しかし、ほかの女たちの中で、永造という講師を一人占めにしてきたのだから、彼女が誇りに思ってないはずはない。演壇に立っていた人と知っているだけで、たしかに人は誇りに思うものなのだ。アメリカで自分は下宿先きの主婦に、この異邦人を自分の家において、教会のベースメントの集会場で永造に話をさせたあとで、彼女は自慢げな顔をしていたものだ……。
いったい、悦子が今日出かけてきたのは、そもそも目的は、演説をきくことだけだったのか。永造はそのことがどうしてか不思議に奇妙に思われ、がっかりもした。
一度か二度、恵子と来て短い時間を過したことのある「お休み宿」が顔をのぞかせているところへやってきた。そこを通り過ぎて喫茶店も二、三軒あるところへやってきた。永造はのぞいてみた。空席があっても、騒々しい音楽が鳴っている。

「これでは、ゆっくり話も出来ない。よそへ行きましょう」
と永造はいった。
(自分はもう、そういう堅い話を女とするのは沢山なのだ。さっきの演台のまわりに集まった主婦の一人がした積極的な話も、堅い話の部類に属するものなのだ)
と思われてはならない。
講演会場からすぐ近いところにある。講演会に出席するときいたときから、この距離の近さが、永造の頭にこびりついていたと思われてはならない。慎重に扱わなければならぬ、と考えていた。講演の最中も講演後のことを忘れてしまうわけにいかぬどころか、彼があんなにサービスをしたのは、ことによったら、悦子と宿に入りそこで時間を過すのに都合のいい状態にしておこうという心づもりがなかったとはいえない。少なくとも、……彼は何か浮き浮きしていた……。
こう思われてはならない。
永造が立ちどまると、悦子は少し離れたところに立ってあたりを見廻していた。悦子の心中に男を求めているとしても、男というよりは話相手を求めているのであって、そうかといって、それだけではないのだから、けっきょくは話をしながらベッドの中で自然に抱き合うというふうに運ばれて行くことになる。そのための話は、今の通りでいいのか、不意にそのものズバリの話にもって行くタイミングはどのようにしたらいいのか。
この堅い真剣な表情からすると、とてもいいだせたものではない。そういう女は苦手なのだ。恵子のこともあるので、彼女と宿へ入ったとしたって、あとのことを大して心配しているわけではない。しかし真剣に思いつめられたり、あとでムキになって悪いことをしたと責められたりしては困ってしまう。だが遊びなどが面白いだろうか。よそのの女とこういうことをするのは、相手がただの遊びであったのでは何も自分が一役買う必要はない。たとえ身体の欲求そのものためであったにせよ、真剣に求めていなければ意味がない。「先生!」と悦子の声がした。
「先生、あなた、奥さまと来ているつもりになっているのじゃない?」
といわれたりはしないだろうか。と永造は悦子の顔を見た。
「私がアメリカへでも出かけたら、あそこで、第二の人生に踏み出せそうに思うのよ」
「ワシントンさんと別れて、そうされるなら、私は大賛成ですよ。どうしてもアメリカでなければいけないのでしょうかね。アメリカであなたは何をなさるつもりですか」
「それはボッブもいうし、家の者もいうことですわ。でも日本にこのままいるか、アメリカへ行くかとなると、私は

アメリカに行きたいわ。私は日本のこの空気は度し難いと思うのよ。私の家の者だって誰だってそうなんだけど、責任というものをもたないんですから、日本人は。これでも私はただ楽だから自分の生活をするというのは、嫌いなのです」
「しかし、向うで何をなさるつもりですか」
また喫茶店などのある賑かなところへ近づいてきた。永造は心の中で溜息をついた。
「だからそれを、先生に御相談したいのよ、私。私の話は真面目なんですから」
それが第一の目的だとしても、そのあとにはこちらの誘導でどうにでもなる。それはけっきょく本来の目的なのだ。ああ、そのためには、自分はいくらか悪者にならなくっちゃあ。悪者になるのは、とてもつらいことだが、場合によっては、成行上しなくては。何しろ、ここまで無駄なことをしてきたのだから。
やはり、こちらから手を出してはいけない。さとのがどのような手段に出てくるやもしれない。そのことにどうして気がつかなかったのであろうか。
「悦子さん、ちょっと」
「何？」
「腕を組んで歩きませんか」
悦子は立ち止ってじっと永造を見すえていた。
「ボップが相手じゃあるまいし」
「だからボップとなら組んで歩いているんでしょう。このままでは話しづらくはありませんか」
「……」
「あなたとの間がこんなに離れていてはあなたも大きな声を出さないといけないでしょう」
また悦子は歩きだした。
「ボップはボップよ。ボップといえばあの子よくこのへん来るらしいわよ」
「誰とですか」
「このへんといったって、喫茶店もあるし、それから……色々よ。色々のところがあるんじゃない？」
悦子はどうして、相手の名をいわないのだろう。
「その、アメリカでの仕事のことは、ぼくも考えたことはあるのです」
ロサンゼルスやニューヨークで日本人のやっている商売の手伝いをするか、それとも金持のアメリカ人の妻になるか、そのほかに道があるとは思えない。
「さっきの講演会にいた人が歩いていたわ」
悦子は今になって急にそんなことを口にした。
「それが、ひとりでいたわよ」
「そうでしたか」
「気がつかなかった？　私には分っていたわ。誰かを待っ

ているのかもしれなかったわ」

49

「さあて、と」
永造は歩きながら腕時計を見た。そうしながら、こういう仕草を女の前でするとき自分が最も下らないことをしているときだ、と思った。
「どこかへいらっしゃるの」
悦子はそういうような表情を見せたが、何もいわなかった。これが白人だったら、すぐそういうところだ。あるいは、
「仕事中？」
というようなことをいうところだ。
外人と暮しても、いかにも日本人気質だ。しかし、
「さあて、どこへ入りましょうかね」
ホテルの一室であまり乗気でない仕事が待っている。そこへ悦子を連れて行く気はまったくないが、
「ホテルへ連れてって下さらない、私、前田さんがどんなところでお仕事しているのか見てみたいのよ」

というようなことをいえば、
「いやあ、それは。見るほどのことはありませんよ」
とこたえるけれども、彼の心はトキメキをおぼえるであろう。
数日前ホテルへくることに決ったとき、永造は陽子に、さとのいない時を見はからって、
「子供といっしょに食事でもしようか」
と話しかけた。
「食事？　どこで？」
陽子は彼の顔を見ずにたしかにおかしな笑いを残している。
「あんたと二人だけでもいいよ」
永造は陽子を家とは別のところへ誘いこんで、そこの新しいシーツの上で、新しい気分で過したいと思ったが、彼女がそのコンタンにあからさまに気づいても困るし、まったく気づかぬということも情けないことであった。
「二人だけで？」
陽子は眉をひそめた。
「さとのさん？　ちょっと」
さとのの姿をさがし求めているようなそぶりを見せていると彼は思った。永造はしばらくホテルのまわりの景色のことをブツブツ語ったが、景色にはもともと陽子が何の関心も抱いていなかったことに気がついた。どうしてうっかりしたことを、恵子にでもいうようなことをいったのだろう。だがその陽子が学校のピクニックに附添って行って帰ったとき、景色のことを子供と二人の時に思い出して話していたような気がするが、しかしだいたい景色のことが嫌いなのだ。景色を見て、
「まあ、きれい」
といったおぼえがない。しかし……
ピクニックから戻ったとき、楽しげに帰ってきて、旅先きの話がはじまってしばらくしてからだ。突然彼女はわめき出した。
「いいかげんにして食事の用意をはじめないかね、とは何ですか！　景色のこと一ついえやしない！」
彼は自分のいったことばがどうしてそういう強い反応を呼び起したのか驚いた。しかし驚き呆れた顔をしてどなっているのは、たしかに妻の陽子であった。
「あんたは、私を怒らせようと思って待っていたのだわ」
「そんな話、ききたくないんだ、こっちは」
と永造がわめいた。
「こっちなんか、何だい」
いきなり楽しげな話を機関銃を打つように話しはじめたとき、どうしてもそれをぶち破ってしまいたくなったことは事実だ。景色の話より大事なことがあると「こっち」は思っていたのだ。それは夫婦の優しい間柄のことなのだ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com